

甲斐先生の授業アイデア集

東京都港区立赤坂中学校教諭
甲斐利恵子



本連載「教師力講座」がスタートして七年が経ち、今号で最終回を迎えることとなりました。

今回は、これまでご紹介した授業のアイデアの中で、毎日の授業にすぐ取り入れられそうなものを、ジャンルごとにピックアップしてご紹介します。

授業びらき

新学期の子どもたちは、輝くばかりの表情をしています。授業びらきでは、このやる気に満ちあふれた子どもたちの「伸びたい」という気持ちを大切にしたいものです。

自己紹介

最初の授業では、教師が自己紹介をすることが多いと思いますが、私は「国語の授業での自己紹介」という意識をもって行うようにしています。後で行う「名前の本」という単元（P15参照）を意識し、黒板に名前を書いて「二分で自己紹介をします」と言っておくように話します。

私の名前は、甲斐といいます。アサリとかシジミの貝ではありませんよ。やり甲斐があるとか、やった甲斐があったねというときの

甲斐です。
利恵子という名前は自分では「利益に恵まれる子」という意味だと思っていました。あるとき、母に尋ねてみたんです。
「利益に恵まれる子になってほしいと思っ
てつけたんだよね。お金持ちになってほしい
という意味でしょ？」と。そしたら母が言う
んです。「確かにそうだけど、ちょっと違う。
利益に恵まれる子にもなってはほしいけど、で
きれば利益を恵む子になってほしい。この人
に会えてよかったと、周りの人に思っても
もらえる人になれるといいね」と。
みなさんが甲斐先生に出会えてよかったと
思える授業をしたいと思っています。よろし
くお願いします。

国語の授業では時間を決めて発表すること
が多くあります。これは、そのはじめの
一歩を踏み出すための、小さな学習です。
教師の言動はすべて教材になるということ
を意識して行いたいものです。

名前を材料にした学習

名前を覚えていない教師に、子どもたちが心を開くはずがありません。一日も早く名前を覚えるためにも、名前を材料にした小さな学習を行うとよいでしょう。

私は「名前の本」という単元をよく行います。漢和辞典で自分の名前に使われている漢字を調べさせ、ミニ本を作成して、一分間スピーチをさせるというものです。名前が平仮名だけの子どもや、外国籍の子どもの場合は、「もし、漢字で書くとしたらどんな字がいい？」と聞いて調べさせます。

【美】みーみー

①うまい ②うるさい ③うしろめたい ④うしろめたい ⑤うしろめたい ⑥うしろめたい

意味（会意）羊と大とを合わせた字。

美は大きな羊。

肥えておいしい動物である羊、おいしい意味を表し、うつくしい、喜ぶの意味をもつ。

【熟語】美人・・・顔がきれいな美しい女性。君主として、美妙・・・比喩的にもよく美しい。美化・・・きれいにする。美しくする。

【幸】ゆきー

①さいごめい ②希望する ③さいごめい ④さいごめい ⑤さいごめい ⑥さいごめい

意味（会意）土と羊とを合わせた字。

土は天で若死にすること。羊は遊む、さかすこと。幸は若死にすることと不幸の逆の意味で、さいごめい。

【熟語】幸先・・・よりこの上ない。しあわせのまじり。幸運・・・よいめぐりあわせ。しあわせな運命。幸福・・・さいごめい。しあわせ。おめでた。

▲「名前の本」の生徒作品

ノート指導

新学期の新鮮な気持ちのときに、授業記録を取るこの大切さをしっかり理解させることが大事です。ノートは板書を写すだけでなく、メモを取ったりしながら、自分の学習の足跡を残すこと、学んだことをきちんと言葉にして、自分だけのノート作りをすることを伝えるようにしましょう。早い時期から丁寧に指導し、授業記録を習慣づけさせたいですね。

学習の予定

授業前の休み時間に、国語係が板書する。

授業記録

初めての記録なので、時間を多めに取って書かせた。「事実」「学んだこと」「感想」の三本柱。板書もここに記入する。

メモ欄

授業中に辞書を引いたり、調べたりした言葉があれば、ここにメモする。

最初なので、教師が評価項目を書いた。

日付と回数		No.
4/3		(1) 二授業記録を書く
月	日	
		辞典の早引き、暗唱、朗読をやりまし、朗読は書いたん
		の気持ちを考えて読むとい
		うことを知りました。私はあ
		まり辞書をつかわないのでこ
		れからたくさん使って早く引
		るようになりたい。はじめての授
		業はいろいろのことをしてたの
		しかたです。
		（授業記録）
		・事実（具体的に）△
		・初々知ったこと、学んだこと。
		・感想等 ×
		心算★何をする前
		に知っておくべきこと。
		のけ★最初のしんかん
		えつ★
		勝つ
		大見心

▲授業びらきでノートの取り方を指導したときのノート

話すこと・聞くこと

「話すこと・聞くこと」の学習でいけば、
ん気をつけたいのは、活動の場面を設定する
だけでなく、何を学ぶのかを明確にして
取り組ませるということです。子どもたち
が、活動の中で何を学習するのか意識でき
るように工夫して指導したいものです。

■リハーサルの学習

私は、子どもたちに発表をさせる場合、
必ずリハーサルの時間を確保するようにし
ています。そうすることで、子どもたちが
発表を具体的にイメージでき、この学習で
何が大切なのかを自覚することができら
れます。

私はまず、一斉に発表の練習をさせます。
自分の発表内容が、実際にどのくらいの時
間を要するのかを体感し、内容をブラッ
シアップさせるためです。教師が「残り
〇秒」と声をかけて、時間を意識させると
よいでしょう。また、机間指導をし、発表
内容の再検討について、助言をするよう
にしましょう。

一斉に練習をした後は、ペアを組んでリ

書くこと

書くことに苦手意識をもつ子どもは少な
くありません。日常的にさまざまな小さな
「書く」学習を行い、書くことに対して抵
抗をなくしていくことが大事だと考えます。
子どもたちが「書きたい」という気持ちに
なるような学習をご紹介します。

■「言葉の小劇場」

「言葉の小劇場」は、教材文に出てくる
言葉を取り上げ、その言葉を使って百字程
度のお話をつくるという学習です。フィク
ションであろうとなかろうとかまいませ
んに紹介するのは、「少年の日の思い出」
に出てくる「色あせる」「身にしみる」とい
う言葉を使って、子どもが書いたものです。

「アルバムなどが入っている段ボ
ー
ルの中から、色あせた一冊の本が出て
きた。昔、おばあちゃんからもらった
ものだ。その本をギュッと抱きしめ
ると、温かさが身にしみた。」

子どもたちは辞書で調べ、用例を参考に
して、文章を書いていきます。書いた後は、



ハーサルをさせます。これにより、聞き手
を意識した発表ができるようになります。
声の大きさや間の取り方などの技能面はも
ちろん、聞き手にとってわかりやすい言葉
で話しているか、聞き取りやすい順番で話
しているかなど、内容面についても考えさ
せるとよいでしょう。また、聞き手側には、
「こんなことに気をつけて聞くように」と
いう「聞く観点」を示すことも大事です。

■「聞き取りメモシート」

「聞く力」をつけさせるために、私は短
いお話をし、子どもたちにメモを取らせる
という学習をすることがあります。そのと
きには、聞き取りメモシート（下参照）を
使用します。このシートは、縦書きでも横
書きでも、図を書いても自由。子どもたち

聞き取りメモ	年組番（ ）
月日曜日	
メモ	
まとめ	

▲聞き取りメモシート

には「メモを取るときは、聞いたままをだ
らだと文章で書いてはいけませんよ」と
伝えます。お話を聞き終わったら、「まと
めの欄に、お話の内容を一文でまとめなさ
い」と指示し、要約をさせたりします。十
分もあればできます。
要約させた後は、子どもたちが書いた
シートをコピーし、教えたいことに焦点を
絞って講評するとよいでしょう。
聞いて要約するというだけでなく、聞い
てそのことに対して意見を書くなど、い
ろんな学習をすることが出来ます。

互いの文章を読み合うことで、自分が取り
上げなかった言葉の意味や使い方を知るこ
とができます。この学習は、語彙の拡充に
もたいへん役立ちます。ぜひみなさんにも
取り組んでいただきたい学習です。

■「ウソ日記」

新出漢字を使って日記を書くという活動
で、内容は『はれときどきぶた』（矢玉四
郎／岩崎書店）のように、ウソでよいので

す。とにかく、時間内にどれだけ多くの新
出漢字を使えたかが鍵。多少は無理のある
話の展開もOKです。
「ウソを書きなさい」と言われて、最初
は驚いていた子どもたちも、今では、はり
きって書くようになりました。書き終わっ
た後に作品を読んで発表すると、聞き手は
新出漢字を頭に浮かべながら聞くようです。
「ウソ日記」を始めてから、漢字力もつい
たようで、まさに一石二鳥の学習です。

使った新出漢字をこの
欄に改めて書き出す。

新出漢字を何個使
えたか、個数を書く。

ウソ日記	氏名（ ）
五月二十九日・雨	
7	個
鈴 声	今日は学校で大きなことがあった。昼休みのことだ。僕は
凍 っ せ た	教室にいた。そのとき、突然鈴声が変わった。とても近くで、それは
恐 怖	空気を動揺させた。時を凍らせた。たんだんと、感染していく
慌 然 だ し く	がたいにみんなに恐怖が伝わっていくのが分かる。慌然とした
銘 柄	そして、次の瞬間、教室のドアが開いた。男が入ってくる。男の
飢 え	容姿はよく知らなかったが、その手に握られていく鈴が目に
	に飛び込んできた。その鈴がどんな種類のものか、銘柄は
	何なのかも何も分からなかった。しかし、そのとき僕たちは
	状況を把握した。
	その後、しばらく分らない。五人が重傷を負い、自分も
	全体的な状況がわかった。あのとき、教職員が来て、事
	態は収拾された。よかった。
	男は永遠切りの被害者のようである。なぜうちの学校を
	襲ったのかは分からないけど、飢えや非しびが甲かきまじめ
	ていたのは確かだ。と思う。

使った新出漢字に傍線をつける。……

読むこと

「読む力」をつけさせるために、やはり子どもたちには多くの本と出会わせたいと考えています。私が、日頃どのような工夫をして子どもたちと本とを出会わせているかをご紹介します。

■本の紹介をする

私は、月に二回ほど、「国語教室通信」というプリントを子どもたちに配布しているのですが、そこには必ず「今週の本棚」というコーナーを設けています（左参照）。

【今週の本棚】

『お父さんのバックドロップ』

作者 中島らも

出版社 集英社文庫 ¥380 (税入)

下田君のお父さんは有名な悪役プロレスラー。豆頭は金髪、顔は赤白のくま取り…。下田君はそんなお父さんがイヤでたまらない。子供と子供、はいお父さんの物語

▲「今週の本棚」コーナー（「国語教室通信」より抜粋）

本は子どもたちとの対話を生み出してくれます。定期的に子どもたちへ本を紹介したいと決意して作ったコーナーです。このコーナーのおかげで、私は書店へ行くのが習慣になりました。教師が常にアンテナを張り、本に関する情報にふれていることは大事だと思います。

本の紹介といっても、毎回同じパターンでは印象に残りにくいので、あるときはあらすじを、あるときは作者を、あるときは主人公を…とアプローチのしかたを変えるようにしています。その作品に合った紹介のしかたを考えることで、教師自身のプレゼンテーションの力もつくような気がします。

本の紹介をする、必ず子どもたちは反応しますので、できればすぐに手に取って読めるよう、実物を用意しておくといでしょう。

■「朗読劇場」

この取り組みは、私の所属する勉強会のメンバーが考えたものです。いわゆる「読み聞かせ」のようなものですが、「読み聞かせ」と言ってしまうと、幼い感じがしますので、「朗読劇場」という中学生にふさわしいネーミングになっています。



なんとといっても「劇場」なので、読んでいる間に注意されたり、後で感想を聞かれたりしないのが人気のようです。ただ聞いているだけ。そういう時間があってもいいですね。私は「朗読劇場」の名にふさわしいように、カーテンを閉め、電気も黒板のところだけをつけて、朗読します。

本を全部読むことはほとんどありませんので、続きは自分で読んでくださいと言うと、たくさん子どもたちが本を借りにきます。ほんの少しの時間で実現できる「読書」の時間です。

連載を終えて

私が大村はま（※）という人物に出会ったのは二十歳のときでした。『教えるということ』という本です。そのときの衝撃は、今でも鮮明に覚えています。以来、現場の教師になっても大村はまの著書を読みあさり、講演があるといつては出かけ、全集を何度も読むことになりました。いつも大村はまの背中を追いかけていたと思います。けれど、実践を重ね、年齢を重ねても、大村はまは遠くなるばかり。とても追いつきません。こんな年齢になってもまだまだなんだなあと思っていたときに、「教師力講座」のお話がありました。こんな自分ができることがあるのだろうか？

当時、『国語教育相談室』を担当していた広報部のKさんは、私の教室で起こるさまざまな出来事を本当におもしろそうに聞いてくださいました。それで？ それで？ 書いってください。ととてもおもしろいですよ」「失敗をおもしろく語れるっていいですね」と妙な励ましをしてくださったので

した。

Kさんに背中を押してもらった私は、数々の失敗から生まれた言葉と、大村はまの言葉を重ねて語ることから始めました。そして、七年。多くの方々にたくさんの方の励ましをいただいたおかげで続けることができました。感謝申し上げます。また、Kさんをはじめ広報部の皆様、いつも熱心に話を聞いてくださり、ありがとうございます。

連載第一回の文章を読み直して、このとき書いた、次の言葉が私の教室を貫く基本的な考え方だったと再認識しました。

生徒たちは「自分を伸ばしてくれる教師」を求めているのです。生徒自らが「〇〇したい」と思うように、まずは教師自身が楽しんでやりましょうよ。

私たちは、自分自身が楽しくなることを大事にしなければなりません。そして何より、子どもたちが「読みたい」「書きた

い」「話したい」「聞きたい」「考えた」と思える魅力的な教室を、実現しなければなりません。連載を終えるにあたって、再度、この言葉をみなさんにお伝えして終わります。

※大村はま（一九〇六―二〇〇五年）
国語教育研究家。東京女子大学卒業。実践の中から「大村単元学習」を生み出した。著書に『大村はま国語教室』『教えるということ』など。

かい・りえこ

福岡生まれ。東京都立赤坂中学校主任教諭。光村図書中学校「国語」編集委員。専門は国語科単元学習。著書に「子どもの情量」共著。光村教育図書、聞き手話し手を育てる（共著・東洋館出版社）など。

